

## P10 写真で見るセト研創立 20 年史—研究大会を中心に

○佐野修（石川県立自然史資料館），箕輪一博（柏崎博物館），平口哲夫（金沢医科大学），セト研第 19 回実行委員会

### **The photography exhibition for the 20th anniversary of the Cetology Study Group of Japan, with a focus on the annual meetings**

Osamu Sano (Ishikawa Museum of Natural History), Kazuhiro Minowa (Kashiwazaki Museum), Tetsuo Hiraguchi (Kanazawa Medical University), and the Executive Committee of the 19<sup>th</sup> Annual Meeting of the Cetology Study Group of Japan

本研究会は、金沢大学名誉教授の山田致知先生を代表として、39名の会員をもって日本海セトロロジー研究グループとしてスタートした。初舞台は、1988年12月2日～4日の3日間に渡って、能登半島で開催されたシンポジウム「日本海と鯨類」（夢半島のと推進委員会主催）における主管の役であった。きっかけは山田先生が98年3月に「能登でイルカに似た鯨が水揚げ」という北國新聞の報道をご覧になり、写真からその鯨をオウギハクジラと看破。そしてこの年、相次いで能登に漂着したオウギハクジラを確認していくこととなった。当時、珍しいとされていたオウギハクジラの漂着個体はもちろんのこと、ほかの鯨類に関する情報も日本海沿岸には乏しかった。研究者や市民を巻きこんだネットワーク作りが必要と考え始めていた山田先生を後押しするためのシンポジウムでもあった。

2008年の本大会は20周年の記念すべき大会といえる。そこで我々は、毎年開催されてきた研究大会の写真記録を集め、20年の歴史を振り返ってみた。

第1回研究会は1990年、金沢市で開かれ、当時の会員数45名中35名が参加した。参加率は77%の高率であり、研究会の必要性が立証された。以後、魚津市、上越市など会員の多い北信越で研究会が開かれた。第8回は福井県の三国町で開催され、その年の1月に漂着した生々しいナホトカ号の船首と重油の爪あとを見学した。この頃、会員は全国に広がり、参加会員の旅費軽減のために北信越で開催するという意味がなくなった。開催地を全国に広げることになり、第9回は福岡市のマリンワールド海の中道で開催、参加者はついに100名を越えた。以後、佐渡、東京、鳥取、函館、宮崎などで開催されている。この間に、団体の名も日本海セトロロジー研究グループから日本海セトロロジー研究会に、そして現在の日本セトロロジー研究会に発展している。

過去18回の研究大会の写真記録が思い起こしてくれる事は多い。この展示がセト研の将来構想に役立つことを願ってやまない。

なお、本会顧問の本間義治新潟大学名誉教授が第1回研究会から第19回大会まで皆出席、皆発表および会誌「日本セトロロジー研究」の全号への投稿を“20年間の大偉業”として称え、さらなる記録更新を期待したい。